

非専門家に開かれた学びの「想像＝創造」のための実践

○追手門学院大学 内海博文
立教大学 中川理
摂南大学 上田達
大阪国際大学 栃澤健史
追手門学院大学 白石真生
神戸女学院大学 景山佳代子

目的

社会学／人類学が、非専門家にとっても、社会を生きていくための一つの「知恵」となるような学びがいかんして可能になるか。その方法の探索と実践の過程を共有していくことを、本報告の目的とする。社会学／人類学が、社会を捉え返すための有効な道具となるためには、そこで使われる諸概念と私たちの生活実感とのつながりを立ち上げていくことが重要である。その時に求められる社会的な「想像力＝創造力」を動員する、その仕掛けを考えていく。

方法

そのために、「社会学／人類学をする」ことに主眼をおいた、報告者らによるテキスト作成のプロセス自体を、データとして取り上げる。これは社会学／人類学をする自分たちの実践自体を分析対象とすることを意味する。本報告では、この実践を次の二段階において捉えていく。まず“「社会学／人類学をする」ために、私たち（社会学者／人類学者）はなにをしているのか”という、学問実践の前提を言語化する作業。さらにここで言語化された実践を、非専門家と共有するために、日常語を出発点として翻訳していく作業、である。

結果

テキスト作成のためのプロセスは、そのままテキストの「構成」という形をとった。まず非専門家との共有のための翻訳作業においては、自分たちが社会を捉えるときに、どのような視点のおき方をしているのかを言語化し、「身近なものの意外な広がり」「遠いものの思いがけない近さ」という部をおいた。社会に対する「想像力／創造力」は、日常世界に対する「問い」が生まれた時に発動される。その「問い」の立ち上げにおいて、「社会学／人類学」が、私たちが世界をみるときの遠近感に揺さぶりをかけていると考えたからである。さらに実際、社会学者／人類学者である自分たちが、どのように社会学／人類学をしているかは、「調べる」「表現する」という形で言語化していった。

結論

「社会学／人類学をする」ことは、専門家だけに閉じられたものではない。そこで蓄積された知識、概念といったものへのアクセシビリティに差異はあったとしても、社会をみるときの遠近感を揺さぶり、世界の見方を変更することは誰にでも開かれている。あるいはそのような間口を開くことが「社会学／人類学」を専門に学ぶ者の一つの仕事になるのではないか。そしてそのためには、「想像力／創造力」を羽ばたかせる「問い」の立ち上げが重要となる。自分のなかから「問い」を立ちあげるには、異質な他者との対話が不可欠となる。テキスト作成のプロセスもまたそうした対話そのものであったし、「社会学／人類学」の学びのために、専門家が、どれだけ良き対話者となれるかが問われているのではないだろうか。